

～旧約聖書を読んで感じること～ (48) 預言者としてのサムエル

サムエルは亜麻布のエフォドを着て下働きとして神殿で仕え始めました。祭司エリの息子たちはならず者でありながら祭司の勤めについていて、幕屋で仕える女たちとたびたび床を共にする有様でした。彼らの下働きの者たちも、人々の供え物を軽んじ、横取りし、やりたい放題でしたが、祭司エリは非常に年老いて来て、この乱脈ぶりを知っても、正す力はなくなっていました。

一方、少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった。(サム上 2:26)

と記されていますが、醜悪な神殿の中の様子はサムエルの目にも耳にも達し、どんなに心を痛めていたことでしょう。

祭司エリは、神は、神を侮り、軽んじるエリの息子たちを滅ぼし、

「わたしはわたしの心、わたしの望みのままに事を行う忠実な祭司を立て、彼の家を確かなものとしよう。彼は生涯、わたしが油を注いだ者の前を歩む。」(サム上 2:35)

というエリの家への神の裁きと、新しい祭司を立てるとの言葉を聞くのです。

そのような中で、ある夜、祭司エリが自分の部屋で、少年サムエルが神殿の中で寝ていた時、サムエルは呼ばれる声を聞くのです。サムエルは「ここにいます」と言って、エリのもとに走っていきました。「お呼びになったので参りました」とエリに言うと、エリは「私は呼んでいない。戻ってお休み」とサムエルに言います。このことが 3 度も続きました。祭司エリはサムエルを呼ばれたのは主であると悟り、「もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と答えなさい」と教えました。4 度目にサムエルが呼ばれる声を聞いた時、エリに教えられたとおりに答えました。そして、「両耳が鳴る」と言うほど恐ろしい、エリの家を永遠に裁くという神の言葉を聞くのです。

この事件は神殿の腐敗がサムエルの心を苦しめ、サムエルはまるで夢遊病にでもなったかのような耐え難い思いで神殿の中で暮らさなければならなかった結果でしょう。恩人エリと神の言葉の狭間で、サムエルは心が引き裂かれるような思いであったでしょう。祭司エリはサムエルに語られた神の言葉を聞き、信仰を持ってそれを受容し、サムエルに主の言葉が臨むことを確信しました。

エリは言った。「それを話されたのは主だ。主が御目にかなうとおりに行われるように。」(サム上 3:18)



預言者サムエル Claude Vignon

その後、サムエルは祭司エリに認められ、シロの神殿で祭司として、また、預言者としてめざましく働くようになりました。

サムエルは成長していった。主は彼と共におられ、その言葉は一つたりとも地に落ちることはなかった。ダンからベエル・シェバに至るまでのイスラエルのすべての人々は、サムエルが主の預言者として信頼するに足る人であることを認めた。主は引き続きシロで御自身を現された。主は御言葉をもって、シロでサムエルに御自身を示された。(サム上 3:19-21)

母ハンナが誓ったように、サムエルは自分自身を主に捧げ、また、母が祈ったように、サムエルは「高貴な者と共に座につき、栄光の座を嗣業として」与えられました。祈りとは聞かれるという事と、サムエルが「主よ、お話しください」と言ったように、神のみ心を聞く事でもあるのです。

自ら望んだ道ではない上、苦難の道でもありましたが、サムエルは従順、忠実に仕えたのです。



幼子サムエル J.Reynolds